5
MAY, 1984

教皇様の聲

心を開いて神の声を！

1　ただいま朗読された使徒の言葉は、人間の良心と呼ばれているものの役割について述べています。「神のみ旨は何か、神のみ前に、善いこと、よみせられること、完全なことは何かをわきまえよ」　あがないのエトスについて考えるにあたり、第二バチカン公会議の言う、「人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただ一人神とともにある」（『現代世界憲章』No.16）ものに、焦点を合わせてみたいと思います。

ここで使徒は「わきまえる」という言葉を使っていますが、一体何を言おうとしているのでしょうか。私たち自身の内的な経験を注意してみると、「評価活動」と呼べる働きのあることに気づきます。「これは善いことだ、これは善くない、正しくない」と、自分でよく言うことがあるでしょう。私たちの内面にある、一種の「道徳感覚」が、善いことと悪いこととを識別するのです。それはちょうど、美しいものと醜いものとを識別させてくれる「審美眼」と同じようなものです。言葉をかえれば、内なる眼と言えそうな働き、善の道を歩む私たちを導いてくれる精神的視力と言えましょう。

けれども、使徒の言葉にはもっと深い意味がありそうです。道徳意識は、一般的な善悪を識別するのみにとどまりません。とりわけ、いま実現しようとしている、あるいはすでに実現した、個別的で具体的、自由な行為を、識別します。これが良心の語りかけであり、良心が評価するということです。つまり、今おまえが独特な仕方で実行していることは、善い、とか、悪い、とか教えてくれるのが良心の働きなのです。

第二バチカン公会議の解答

2　良心は判断の規準をどこから引き出すのでしょうか。これから行なおうとしている行為、あるいはすでに実行してきた行為を判断するわけですが、一体何に基づいてそうするのでしょうか。第二バチカン公会議の教えに注意深く耳を傾けてみましょう。「人間生活の最高の規範は、神的な、永遠の、客観的、普遍的な方法であって、神はそれによって人間社会に秩序をたて、これを指導、統治する。……人間は自分の良心を通して神法の命令を知り、そして認める。それで、最終目的である神に到達するには、すべての行為において、忠実に自分の良心に従わなければならない。」（『信教の自由に関する宣言』No.3）

まことに深遠で教えられるところの多いこの言葉を掘りさげてみると、良心はみずからの行為の自律的な規範ではありません。良心が判断するときの規準は、永遠で客観的で普遍な神法、公会議の語る「不変の真理」にあります。ですから、公会議によると、人間はその良心の中で「神のみと独りきりでいる」のです。単に「独りきりでいる」とは言わず、「神のみと」と言っている点に注意してください。良心とは、どうにもならない徹底的な孤独の中に自分を閉じこめるものではありません。むしろ、神の呼びかけ、神のみ声に、人間の心を開いてくれるものなのです。この点、つまり、良心とは神が人間に語りかけられる聖なる場であるということにこそ、良心の神秘と尊厳が存在します。従って、万一、自分の良心の声に耳を傾けないなら、またもし誤りが良心に入り込むがままにしておくなら、創造主と自分を結ぶ強い絆を断ち切ることになってしまいます。

3　良心は善悪を決定する最終的な規準ではない。良心は道徳法という不変の真理に従わねばならない。ということは、良心が決して誤ることのない裁判官ではありえないということ、つまり、まちがうこともあるわけです。

この点は特に注目に値します。「この世にならわず、(…)考え方を改めて自分を変えよ」（ローマ12・2）と使徒は教えています。良心の判断には、つねに誤りを犯す可能性が残っているのです。

良心が判断を誤ると大変なことが起こります。誤った良心に従う人の行為は、客観的に見ても正しくありません。簡単な事柄についても良心の下す判断は必ずしも最終的決定とはなりえないと申し上げたいのです。

公会議がすでに明らかにしているように、「良心が克服不能な無知のために誤っていることもよくあります。」（同上）　こういう場合には、「尊厳を失うわけではありません」し（同上参照）、誤った良心に従っても罪にはなりません。とは言え、同公会議文書は続いて次の点に注意を喚起しています。「しかし（このような場合でも、）真理と善を探究する努力をあまりしていなかったり、良心が罪の習慣におちいって盲目同然になっていたりするときには、罪になりうるのです。」（同上）

こういうわけで、「常にみずからの良心に従いなさい」と言うだけでは不充分で、いつもすぐに、「自分の良心は真理を告げているか、まちがったことを告げているのか、と自分に問いかけ、うまずたゆまず真理を知る努力をしなさい」と、言い加えておかなければなりません。万一、この点をはっきりさせておかないなら、自分の良心の中に真の人間性を破壊する力を宿し、良心は、神がほんものの善をお示しになる聖なる場であることをやめてしまいます。

自分自身の良心を「形成」することが必要です。信者であれば、良心の形成の助け手として教会の教えにたよることができます。「キリストの意志によって真理の教師であるカトリック教会は、真理であるキリストを告げ、正しく教え、同時に、人間性にもとづく道徳の原理をみずからの権威をもって宣言し、確証することがその任務である。」（『信教の自由に関する宣言』No.14）

「神のみ旨は何か、神のみ前に、善いこと、よみせられること、完全なことは何かをわきまえる」ことのできる恩寵、つまり、真理を行なうために真理の中に生きることができるための恩寵を、救い主キリストに、執拗にお願いしましょう。　（一九八三・八・十七）

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1984 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

信仰は世に勝つ勝利（I）

「世に勝つ勝利はすなわち私たちの信仰である。」（ヨハネ①5・4）

ご復活後八日目の典礼では、使徒であり証人、復活した御方の目撃者、福音史家聖ヨハネがだれよりも多くを語っています。

典礼文全体を注意深く考えてみると、力強く断固とした彼の言葉の「系図」とでも呼べそうなものがあることに気づきます。

目撃者ヨハネ

ヨハネは他の使徒と同じく、聖土曜日から「安息日の翌日」までにエルサレムで起こった過ぎ越しの出来事に共にあずかっていました。ヨハネはキリストの死の目撃者でした。主に従った数人の婦人たちと共に、イエズスの御母のかたわらにいただけ一人の使徒でした。ヨハネは主の死と葬りとの証人であり、空っぽになった墓を最初にみた証人の一人でもありました。

マグダラのマリアが大急ぎで使徒たちに知らせを告げに来たとき、ペトロと一緒に真先に墓へと向かったのはヨハネでした。そしてこう記しています、「彼はこれを見て信じた。」（ヨハネ20・8）それからつけ加えて、「彼らはイエズスが死者の中からよみがえると聖書にあるのをまだ悟らなかった」と。（同20・9）

ヨハネは聖書から主のご復活を悟ったばかりか、自分の目でも知ることができました。つまり、目撃者であったのです。のちに第一の手紙に、自分を含め使徒たちが聞いたこと、目で見たこと、ながめて手で触れたこと（ヨハネ①1・1参照）について、書き記すことになっていました。

ヨハネは、復活されたキリストが最初に使徒たちの間にお現われになったときの証人でもありました。

ですから、ヨハネの記憶しているイメージは、欠くところなく、完璧です。詩篇の次の言葉がキリストに帰せられています。「私は押され、倒されようとした。しかし主が助けられた。」（詩篇118(117)・13）

ヨハネはどちらの出来事にも立ち会っています。主が死の淵へと「押しやられ」たときにも、そののち「死者の中から復活」するよう「主が助けられた」ときも。過ぎ越しの秘義全体が、使徒であり福音史家であるヨハネの眼前で起こりました。過ぎ越しの秘義は「世に勝つ勝利」として、ヨハネの目の前に啓示されたのです。

世に勝つ出来事は現実に起こりました。主は人々の知性と心を勝ちとられたのです。まずはじめに、ヨハネのように身近にいながら「聖書――言いかえれば、旧約聖書のなかで復活について預言されたすべての言葉――をまだ悟らずにいた」人々の知性と心を。キリストの死、それも十字架上でのあの恐ろしい死は、まことに圧倒的で確信させずにはおかぬまぎれもない現実であったがために、かえってこの前代未聞の事実を受け入れることはなかなかできませんでした。まず空っぽの墓、それから生ける者のキリスト、など。

わが主、わが神

「安息日後第一日目の夜」、復活された主がはじめて高間に出現なさったときの証人であるヨハネは、トマの不信の目撃者でもありました。あの第一日目の夜、トマは高間にいませんでした。他の弟子たちに「主を見た」（ヨハネ20・25）と聞かされたとき、あの周知のことばを口にします。「その手に釘のあとを見、指をその釘のあとに入れ、手をその脇に入れるまで信じません。」（同20・25）

その八日後の出来事も目撃したヨハネは、ことこまかにそのときの様子を書き記しています。キリストは戸が閉じてあったのに例の高間にお現われになり、使徒たちに挨拶してからすぐトマに語りかけられました。主は一週間前のトマの態度をすでに知っておられたのです。「あなたの指をここに出し、私の手を見なさい。あなたの手を出して、私の脇におきなさい。信じない者ではなく、信じるものになるように。」（ヨハネ20・27）

ヨハネはその場の様子をつぶさに見ました。「わが主、わが神！」（同20・28）このトマの反応、キリストの神性を信じる信仰告白を、ヨハネは自分の耳で聞きました。おそらくカイザリア・フィリッポでのペトロの信仰告白より、はるかに決然とした告白であったことでしょう。

主は最後におおせられます、「あなたは私を見たから信じたが、私を見ずに信じる人はさいわいである。」（ヨハネ20・29）

のちにヨハネは第一の手紙の中に、「世に勝つ勝利はすなわち私たちの信仰である」と書きましたが、その考えと言葉とは、きっとこのときの経験をもとにして生まれたにちがいありません。これが典礼にみる福音史家使徒聖ヨハネの言業の「系図」であると考えられます。

「神から生まれたものは世に勝つ。世に勝つ勝利はすなわち私たちの信仰である。イエズスが神の子であると信じる者のほかにだれが世に勝てるであろうか。」（ヨハネ①5・4～5）

現代人は自問します。世に勝つことは果たして必要なのだろうか。「世の中を秩序立て」て「みずからの場を確保する」、それでよいのではないだろうか。

それとも、現代の人はこのような疑問を抱いたりはしないのでしょうか。そんなはずはありません、人々にとって、決定的に大切な問いかけですから。そこで、本当の意味をどのくらい理解しているか、同じ疑問に私たち自身こたえてみましょう。

創造主は人間に、「地を従わせよ」（創世の書1・28参照）とおおせになりました。この時から、人間そしてキリスト者の仕事は、ほかでもない「世の中の秩序をととのえる」ことになったのです。（…）

使徒行録をみれば、すでにエルサレムにいた初代の信者たちが、キリスト者的やり方で「世の中を秩序立て」る努力をしていたことがわかります。「だれも自分の持ち物を自分のものだと言わず、すべての物を共有していた。……彼らの中には一人も貧しい人がなかった。土地や家を所有していた人々は、それをみな売って代金をもちより、使徒たちの足もとに置き、必要に応じておのおのに分配していたからであった。」（使徒行録4・32、34～35）

こういう方法で初代の信者は「自分たちの世界を秩序立て」る努力をしながら、「大いに力を入れて主イエズスの復活を証明した。信者は非常に好意をもたれ」（使徒行録4・33）ていたのでした。

例えば聖パウロの手紙からも、働くことがどれほど価値のあることか、どのくらいこのことが理解されていたかをうかがうことができます。同様のことは結婚や家族生活についても言えます。このようなことは全て人間にとって基本的なもので、いずれもどのように「世の中を秩序立てる」か、どうやって「人間の生活を世の中に位置づけるか」という問いに対する具体的な答えと考えることができ

説教・講話・書簡等の抄訳

るのです。

勝利への鍵

こういう情況の中でまず使徒たち、そして使徒の後継者たちが、代々絶え間なく「大いに力を入れて主イエズスの復活を証明し」つづけてゆきます。それは世に勝つ勝利を求めるたゆまぬ挑戦なのです。ここで言う勝利とは「世の中を秩序立てる」のみにとどまりません。さらに言うならば、創造主の御手の祝福を受けて「世の中を秩序だった」ものにする勝利、この世を愛し、「あがなってくださった」御方によって確証され、再び私たちにもたらされる勝利です。

使徒聖ヨハネが見事に記述しているように、キリストのご復活、そしてそこから生まれる信仰は、「自分の生涯をこの世の中のあるべきところにすえる」ことだけには限定できない、という確認でもあります。

たとえ、この世に自己を与え尽くせば完全に満足し、多くのものを得て自分を取り戻すことができると考えたとしても、人間は自分自身、その本質までも、ことごとく、決定的に、現世に与え尽くすことはできません。そんなことは現代の唯物論的考えの途方もない幻影にすぎないのです。

現世は実際、しまいには人間を裏切ります。結局のところ、人間には「死」という一語のほか何も残らないのです。

死は人間にとって大きなテーマとなる現実です。人間の本質の謎を解く鍵となるテーマの一つです。必ずしもキリスト教的ではないにしても、現代思想のあるものはこの鍵を再発見しています。

私たちもそれぞれ日毎にそれを発見します。たとえそれが、知性の鍵、すなわち人間の本質と尊厳についての疑問をとく知恵の鍵であることに必ずしも気づいていないとしても。

（残り半分は6月号に掲載の予定です。）

お告げの祈り

① お告げの祈りのなかで、きょう私たちは、旧約聖書における聖母マリアについての預言をテーマに一連の黙想を始めたいと思います。

第二バチカン公会議は、聖母に「卓越したシオンの娘」という称号を与えました。これは、旧約聖書の聖伝を起源とするものですが、全くもって東方的な趣をにおわす表現です。

実にシオンは古代エルサレムの要塞であり、ダビデ王が契約の櫃をもち来たり、息子ソロモンが神殿を建てたのはこのシオンの頂でありました。以来その神殿のある山は、特にシオンの名で知られます。このようなわけで、シオンはエルサレムの中心、聖なる都の最も神聖な所でありました。その家に神がお住みになっていたからです。こうして、シオンの丘は全エルサレムを、さらには、宗教、政治の中心であった全イスラエルをまであらわすようになりました。

② マリアを「シオンの娘」と称することができます。昔のエルサレムと、選ばれた全ての民は、マリアを自らの召しだしの完成であり具体的なあらわれであると考えていたわけですから。聖マリアはイスラエルの花であります。光と影の織りなす長い旅の果てに咲く花だったのです。この花の咲くまでの期間、神はイスラエルの人々が救い主を迎えることのできるよう助けてくださいました。ナザレトのマリアのうちに神は、アブラハムとその子孫に結ばれた約束を、成就してくださったのです。

多くの聖書注釈書によると、大天使聖ガブリエルがマリアにのべた言葉には、預言者がシオンの娘に話しかけた喜びのメッセージがこだましているということです。実に、マリアは喜びへと招かれています。「喜べ、おお恩寵に満ちたおかた。」なぜなら神の御子が宿ったのだから。その御子は王となり、ヤコブの新しい家である教会の救い主となるだろう。

③ 聖母マリアは「シオンの娘」として旧約の到着点であり、教会の初穂であります。それゆえ、マリアは、永遠に思い出される御方です。私たちが、「信仰の父」であるアブラハムとの絆や、贖い主を待ち望んでいた人々との絆を思いだすよすがなのです。それだけでなく聖母は、新しい「シオンの娘」である教会は喜びのうちに生きなければならぬと教える存在です。実にキリストはつねに私たちの中心におられます。道行をつづけるかぎり、私たちは緊急非常事態に直面してふるえあがるに違いありません。しかし、「信仰のうすい人々」のように恐れてはならないのです。キリストは力強い御方であって、私たちを利己主義や冷淡な心から救ってくださいます。御血を流して、王であるキリストは私たちをご自分のものにしてくださいます。すべての被造物が完全な愛を得ることのできるように。

（一九八三・六・二十六のアンジェルス）

愛するみなさん

ルルドでの祈願

キリストの御母よ、御身の汚れなき御心のみ前で、赦しにより人々を生まれかわらせ、御体により糧を与えるために、ご自分をささげてくださった私たちの救い主と、ふたたび一つになりたいと望んでいます。世の救いのためのいけにえと誰よりも堅く一致しておられる御身は、ベルナデッタの声を通して、人びとが償いと回心と祈りへの招きに応じるようにと嘆願しておられます。道を歩む私たちが御身の呼びかけを決して忘れることのありませんように。人々と国々の母であらせられる御身は、人々の苦しみと希望をご存知であり、母親らしい方法で、光と闇、善と悪の戦いに気づいておられます。私たちの祈りを聴き容れ、試みに耐える御身の子供たちをお助けください。

私はここルルドにおいて、全教会のための祈りをあらたにいたします。私は世界中の御身に捧げられた聖地で好んで御身に助けを乞います。

ここフランスのルルドで、とくにこの国の子供たちを御身の母としての愛にお任せいたします。この地の人々は、その伝統と大聖堂の芸術、巡礼や民間信仰、霊的著者たちの信心で御身への特別崇敬を大切にしてきました。御身を観想し、御身に耳を傾け、御身に祈るとき、人々はキリストのおそば近くいることを確信したのです。ルイ十三世のように、国民の名において自分をささげた王たちをはじめ、御身に奉献した人々は数多くあります。

御身ご自身、ベルナデッタ・スビルーに、御身の甘美をもたらす現存を経験させ、教会に委ねられた神のおことばを映しだしたメッセージを託されました。母なる聖マリアよ、私たちの捧げ物は、各人、各家族、教会の各共同体の個人的な奉献でなければなりません。各世代の人々が、信頼に満ちた奉献を、それぞれ最も適した仕方で新たにすることが望ましいのです。

本日私は、この国の希望者全員と共に奉献を更新いたします。キリスト教信仰があらゆる計略に打ち勝ち、忠実に伝えられ、若い世代が真の心でその信仰を受けとめてくれますように。人々がみな熱心に御身への祈りをつづけますように。熱心な信者がたえずふえ、兄弟たちを神と隣人への深い愛と宣教の熱意に燃える生活に引っ張って行けますように。教会に愛と一致、光栄と希望が宿りつづけますように。人々のよき模範が国全体を助け、御身がお望みになるような真の進歩を遂げることのできますように。（…）　アーメン。

不変の教え

罪を赦す権能

司祭職における兄弟のみなさん

1　罪をゆるす権能を授けてくれた司教方をそれぞれが生き生きと思い出しながら、ご復活の午後のイエズスに近づきましょう。聖ヨハネが語るように、弟子たちがユダヤ人をおそれて高間に閉じこもっていたとき、主はお現われになりました。そして、御傷跡をお示しになり、二度、「平安」と仰せになりました。弟子たちはよろこびに感きわまった様子です。そのときイエズスは、単純だが厳かな使信(メッセージ)をお与えになります。「父が私をお送りになったように、私もあなたたちを送る」(ヨハネ20・21)と。そしてさらに、創世記のあの生ける息を象徴するかのように、彼らに息をふきかけ、その意味を注意深く説明なさいます。「聖霊を受けなさい。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさない人はゆるされない。」(同20・22～23)

2　キリストよ、この真の過ぎ越しの贈り物を、私たちと世界中の全司祭がふたたび生き生きと受けることができますように。これは、常に罪への傾きをもつ人類を、死から生命の状態へと導くためにさし向けられる贈り物です。復活の日、すでに御身は、他の秘跡と同じく御身の心からでる贈り物を、私たちがどのように使うかをご存知でした。この崇高にしてもっとも人間的な聖務に従事するにあたり、私たちがお捧げするよろこびと疲労をご存知でした。こんにち、罪とは何であるかをほとんど考えに入れず、その上、叙階の秘跡で与えられた罪を赦す権能までも軽視する風潮がひろがっています。ここルルドで、聖マリアはベルナデッタを通して、悔悛の心をもてとお招きになりましたが、回心の勢いはまだまだ衰えていません。司祭の聖務のおかげで、無数の男女が、告解場で、この聖地のここかしこで、心の清い者のもつ平和と、福音に忠実であるための勇気を再発見してきました。

「私たちの大司祭、きよいもの、罪のないもの、けがれのないもの(…)天よりも高い」(ヘブライ7・26)イエズスよ、危険な非現実的考えに惑わされて、罪と罪の赦しを軽視している人々をあわれんでください。御身は、「全ての人を癒し救うために」この世においでになりました。私たち司祭を選び、秘跡によって御身に一致させ、人と神、また人間同志の間に、和解をもたらす使命をつづけさせてくださることに、心から感謝いたします。

3　これは、昔も今も絶対に欠くべからざる使命です。聖マテオの記す、「諸国に弟子をつくりに行きなさい」(28・19)ということばからもわかるように、第一の使命と言えます。さて、御身の弟子になるとは、聖パウロが何度も言ったように「御身を着る」ことを意味します。罪にひきずられるようなら、反対に、御身を脱ぎ捨てることになるのです。御身のみ教えと、教会のあらゆる聖伝によれば、罪とは個人的なもので、私たちの中で御身が成長するのをさまたげます。また、罪には社会的な面もあり、御身が教会と社会におゆだねになった義務をみだして、兄弟たちのあいだで御身のいのちが発展するのをさまたげます。御身の神秘体、すなわち教会を損うのです。

4　イエズスよ、初代の使徒たちは御身の神性を宣べ伝えるために血を流すことさえいといませんでした。このような弟子たちをたたえます。洗礼の恩寵をうけたあとでもなお人間の魂と心を荒廃させうる罪、その罪から解き放ってくださった御身の使命を、彼らは完全に理解していましたから。また、与えられた悔悛と和解の聖務を精一杯果たそうと努めた弟子たちの熱意をたたえます。これら初代教会の証言には枚挙にいとまがありません。ひとりの人間全体そして人類の救い主よ、この和解の聖務のために、御身が私たちを召しだし、聖別されたことを、より一層つよく確信させてください。御身は、悔悛と和解が根本的に回心であること、つまり、天の御父への立ち返りであり、兄弟たちの元への立ち戻りであることを、すばらしい方法で教えてくださいました。御身にお願いいたします。ことばに尽くせぬ平和と幸せを与えるこの聖務への私たちの態度と熱意を、とくに祈りを通して新たにしてください。

御身のみ前で過ごすこの祈りのひとときを終えようとするいま、御身が私どもの声と心、動作、司祭としての全存在を必要となさることがよくわかって参りました。御身は私たちをとおして、和解を渇望している兄弟姉妹を教会の名において一人ひとり迎え入れ、慈しみ深く、生まれかわりを可能にする御身の愛の使信をお示しになります。独自の経歴をもち、特定の問題をかかえるひとりひとりに使信を伝え、それぞれが社会で占める場を回復し、救いのみわざに従って社会の一致をとりもどすために。

5　残念なことに、私たち司祭の方で受け入れ態勢をととのえ、人々を喜び迎えようと努力するにもかかわらず、教会のあわれみ深い秘跡のうちに待っていてくださるのが一体どなたなのかを信者の方々が理解してくれないとしても、それをこそ、一つの試練と解せましょう。赦しの秘跡から遠去かっている信者は数知れず、また秘跡にもどっても、実りある与り方のできる人ははなはだ少ない現状をみて途方にくれてしまいます。私たち司祭は、しばしば個人的かつ熱心に赦しの秘跡に与ることがいかに大切であるかを、信者が納得するよう全力を尽くしたいものです。また、教会の命ずるとおり、この聖務を細心の注意を払って果たしたいと思います。形式的、表面的という口実のもとに、この秘跡から人々が遠ざかることのないよう努めなければなりません。ところで、赦しを乞うのをなおざりにしたり、回心を拒んだりするのは罪人の常です。そして和解は神のわざであり、罪人の心を変えるのが神の赦しなのではないでしょうか。司祭は赦しのみなもとから遠ざかる兄弟をみて心を痛めますが、それによって、人々の頑なな心を知って悲しみ、世の救いを思って苦しむキリストのご受難にあずかります。司祭みずから霊的戦いに入らなければなりません。アルスの主任司祭のように、すすんで犠牲をささげ、赦しの聖務をよく準備し、継続しなければならないこともよくわかっているはずです。祈りと断食によらなければ追い出すことのできない悪魔がいます。(マルコ9・29参照)　叙階の日、司教は、「これから成すことを自覚し、生活の中でそれを実行し、主の十字架の秘義にあなた自身一致させるように」、とおっしゃいました。

6　救い主の御母マリアよ、全教会におけるごとく、沈黙のうちに、しかし活動的に、ここルルドの聖地においでになるあなたにおねがいします。キリスト信者にとって必須といえる赦しの秘跡を、とくに重んじ、そのために充分な時間を割いて神学的霊的準備につとめ、日ごと忠実であることのできるよう、イエズス・キリストの司祭全員に恩寵をお与えください。告解こそ、神が兄弟たちを和解させる秘跡であり、同時に、私たちをキリストの神秘体、すなわち教会との一致のうちに生きるよう導くご聖体の準備となる秘跡です。

司祭職における兄弟たちよ、あなたがたが主のみ名において、ここルルドで、また一生を通じて授ける赦しの秘跡の聖務を、心から祝福します。

(一九八三・八・十五)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393